

故郷としての家族 本田一弘

震災から三年三ヶ月。東京中心のマスメディアからすれば、震災は既にもう終わつたことなのかもしれない。被災した地域の人々が「復興」のために頑張つてゐる姿がテレビなどで採り上げられることが多いから、一見問題は解決にむかつてゐるように思われる。しかし、除染の実施、汚染土の処理、仮置き場、最終処分施設、汚染水漏れ、風評被害、震災関連死等々、どれ一つとってもままたらない状況にある。原発事故のために避難を余儀なくされた方々にとつて、「故郷」はもう帰ることのできない場所の謂いになりつつある。時間が経てば経つほど、問題は複雑化している。

・針仕事のさなかの母を襲ひし地震百歳は裁ち台にしがみつきを
り

- ・大地震に部屋に馳すればわが父は崩るる書籍に埋もれてゐたり
- ・二十年は帰れぬと言ふに百歳の母は家への荷をまとめおく
- ・百歳の母も会津に逃れ来て淡々とひとつ歳を重ねる
- ・風邪を病み寝込みたる母百一歳「いよいよ逝くか」と問へば「まだまだ」

吉田信雄の第一歌集『故郷喪失』(現代短歌社)から引いた。吉田は福島県在住の七十七歳で「新アラギ」に所属。昨年三月に亡くなつた佐藤祐禎氏に師事した。大熊町に生まれ、震災前は福島原発から一・五キロの所に住んでいたが、原発事故のために

現在、会津若松市に避難して暮らしている。この歌集は現代短歌社が募つた第一回現代短歌賞に応募した「震災・原発・望郷」というタイトルの三百首がもとになつていて。タイトルからも明らかなように今回の震災を街いなくストレートに実感を大切にして歌つた作品世界である。私は、「あとがき」に引用されている選考座談会での安田純生と雁部貞夫の発言に注目した。

安田「震災の歌なんだけど、一面では家族詠なんですね。特に百歳を超えた高齢の父と母がいて、その両親を震災を通して歌つているようによれる。・・・震災を読んでいるというよりも家族詠そのものに面白さがあるんじやないかと思いました。」

雁部「僕はその辺を評価して震災の歌集関連の歌を沢山詠んでいる人の中ではこの人が一番じゃないかと思つたのね。震災の現場というよりも現地を離れるを得なくて、避難先の暮らしおの、そこでの家族詠なんですね。」

震災詠というと、大上段に構えた視点で震災及びそれに纏わる問題を糾弾するように歌つた作品を目にすることが多いが、吉田の歌はちがう。選考委員のふたりが言うように「家族詠」に特色がある。視点を低くして父や母といった身近な家族を見つめ、その日常をわかりやすく丁寧にうたう。特に三首目は切ない歌だ。「十年」「百歳」という数字が非常にリアルで効いている。たしかに目に見える場所としての「故郷」にはもう戻ることが出来ず喪われたのかもしれないが、吉田はその喪われた「故郷」を取り戻すように繰り返し家族を歌つてゐる。作品的評価は措くとして家族を淡々と歌い続ける姿勢を私は震災詠の一つのあり方として注目してゐる。